

『備南地學』における中国地方の「地域的學習指導案」

高田 準一郎

本稿は、1930年代後半に発行された『備南地學』第四輯の「地域的學習指導案」における地誌的記述の内容を考察した。対象地域は、中国地方である。考察にあたっては、地誌的記述の「裏」と「表」との対比構造を抽出し、図式的に整理した。この構造と通底する日本の近代化の文脈において、鉄道網に象徴される交通整備基盤による空間的再編成の意味を検討し、地誌的記述の可能性を探った。

1. 『備南地學』のテキスト構成

1) テキスト構成

1930年代後半に発行された『備南地學』第4輯¹⁾において、「地域的學習指導案」が提示されている。図-1に表紙を示した。判形は、B5判である。表紙には、「日本地理指導案」と提示されている。対象地域は、関東地方、奥羽地方、中部地方、近畿地方、中国地方、四国地方、九州地方、北海道地方、さらに、樺太地方、台湾地方、朝鮮地方、関東州、南洋群島に及ぶ。総頁数は、251頁²⁾である。表-1に、対象地域と頁を掲載順に示した。

表-1：テキストの「目次」

関東地方	1
奥羽地方	33
中部地方	61
近畿地方	91
中国地方	115
四国地方	133
九州地方	149
北海道地方	177
樺太地方	197
台湾地方	207
朝鮮地方	227
関東州	248
我が南洋群島	250

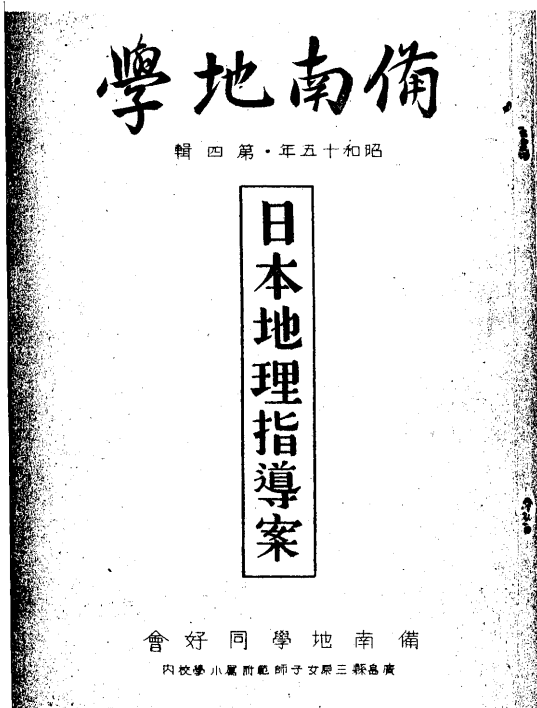


図-1：『備南地學』の表紙

「地域的學習指導案」は、地誌的記述を基調とした探究的指導案である。本稿では、中国地方の「地域的學習指導案」を選び、考察の対象とする。中国地方は、頁数にして、18頁分で、「中國地方の指導観」が5頁、「中國地方指導系統」が13頁である。考察にあたっては、「地域的學習指導案」における地誌的記述の構造を抽出し、図式化して整理する。次いで、この構造に通底する日本の近代化という文脈において、鉄道網に象徴される交通基盤整備による空間的再編成の意味を検討し、地誌的記述の可能性を考察する。

2) 「序」の記述内容

「地域的學習指導案」を提示した理由を、「序」で探ってみよう。序の冒頭部分で、まず、「國家非常時局に際會し、地理教育に與るもの、特に大切な務めは、我が國の現状を最も具体的に理解させ、児童に明瞭な地理的觀念を啓培するにあると思ふ。」(序 p. 1) と述べる。このためには、「……地理的な事情を児童生活の中に見出して行くこと、即ち既有

観念と新しく了解さるべき事象との関連を密接に計ることが極めて重要なこと、となって来る。」(序 p. 1) と指摘する。

では、どのように「既有観念と新しく了解さるべき事象との関連を密接に計る」のか。段落を変え、「この意味に於て具体的な地域の学習指導案を考察して見たわけである。地域性を把握することは既に學界に於ても久しく問題とされ、地域性の鮮明こそ地理の重要な任務とされてゐるのである。」(序 p. 1) と述べる。ここに「地域的学習指導案」を提示した理由が示されている。

2. 「地域的学習指導案」の内容とその構造化

1) 「中國地方の指導観」における記述内容の構造化

「中國地方の指導観」で提示される地域区分は、山陰地方と山陽地方の2区分である。図-2に「中國地方地域区分」を示した。この指導観で示されるのは、山陰地方と山陽地方との比較を通して、「裏」と「表」とに区分する地理的見方・考え方である。

「中國地方の指導観」における流れの順に、自然的条件から整理してみよう。山陰地方の記述は、「本地方は、中國山脈によつて二分され、北の日本海方面は背梁山脈が稍北偏せる上に、白山火山脈の活動が

あり、一層地域を狭小ならしめてゐる。氣候も北西季節風がこの背梁山脈によつて遮られ、一般に冬季は積雪多く、裏日本式特色を有してゐる。」(p. 114) となっている。続いて、山陽地方の記述は、「之に反し南の瀬戸内海方面は、各河川下流域に岡山平野の如き稍、廣き平野が存在し、且つ氣候も北西の季節風を背後の中國山脈によつて遮り、前面の四國山脈により南東の季節風を防ぎ、夏・冬共に雨量乏しく、之がため晴天打續く瀬戸内式特徴を有してゐる。」(p. 114) となっている。

ここでの記述内容は、地勢における山陰地方の「狭」と山陽地方の「廣」との対比、氣候における山陰地方の「積雪」と山陽地方の「晴天」との対比で構成されている。つまり、地勢軸と氣候軸とを付置した構造として、抽出できる。図-3は、その抽出した構造の図式である。

この対比による構造化は、次いで、産業における記述につながっていく。「故にこの自然的条件が反映する産業方面に於ても、日本海方面では農業・牧畜が産業の主たるものであるのに對し、瀬戸内海方面では商業・工業が主な産業をなし、且又農・牧業に於ても日本海方面よりも隆盛を示してゐる」(p. 114)。

ここでの記述内容は、産業における日本海方面の「農業・牧畜」と瀬戸内海方面の「商業・工業」との対比で構成されている。つまり、農牧業軸と商工業軸とを付置した構造として抽出できる。図-4は、その抽出した構造の図式である。

「中國地方の指導観」は、ここで「進歩」という表現で、「只に産業のみならず何の点より見ても瀬戸内海方面が日本海方面に比して進歩してゐる。」(p. 114) と整理する。そして、「裏」と「表」とに区分する地理的見方・考え方を「故に文化の進歩せる瀬戸内海方面を表とすれば日本海方面は文化の進歩の上からすれば裏に相當す。」(p. 114) という表現で、提示する。図-5は、「裏」と「表」との対応関係に着目し、対比による構造を整理した図式である。

このような「裏」と「表」という対比による構造化は、四國地方に言及した記述においても展開される。「……、四國山脈以北の地域が文化の進度から言えば表に相當し、山脈以南の地域が裏に相當し、丁度中國に於ける場合と反對の現象を示してゐる。即ち中國と四國に於ては文化の表に相當する地域が互ひに相向き合つて、裏にあたる地域が相反してゐる」。図-6は、図-5と同様に、四國地方を整理した図式である。図-7は、図-5と図-6とを組み合わせた、対比による構造を整理した図式である。

中國地方地域区分圖

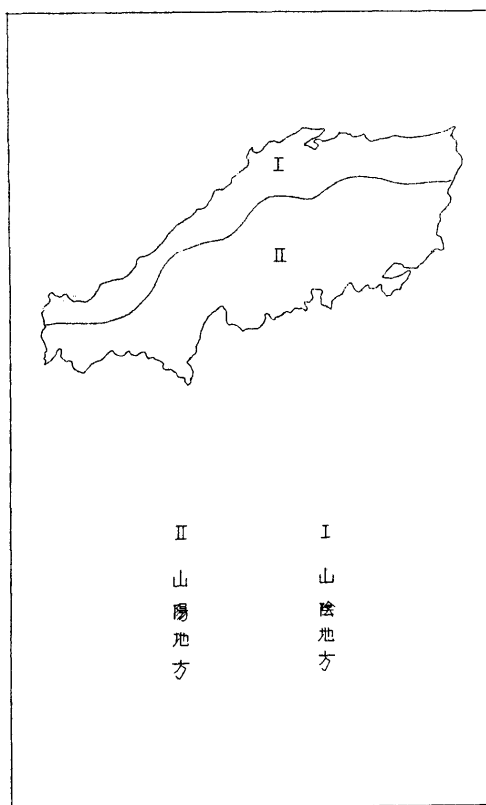


図-2：中國地方の地域区分圖

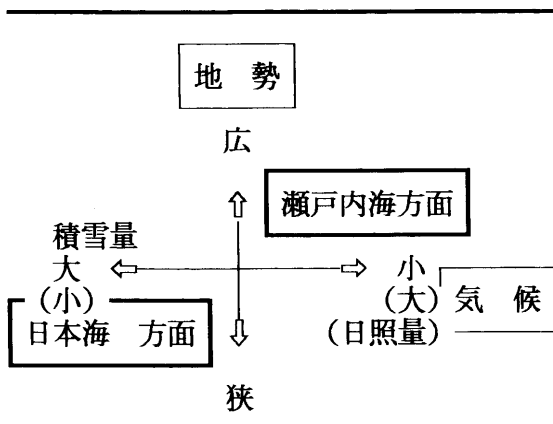


図-3：地域の図式化 (1)

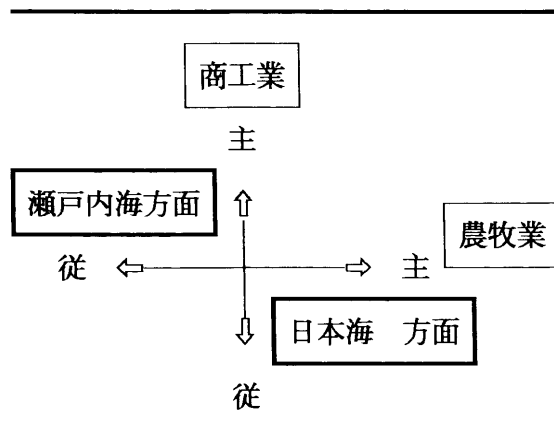


図-4：地域の図式化 (2)

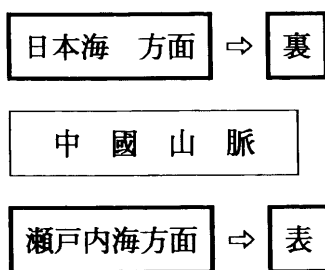


図-5：地域の記号化 (1)

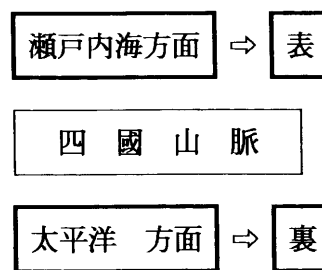


図-6：地域の記号化 (2)

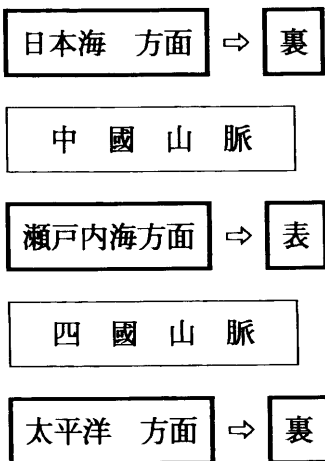


図-7：地域の記号化 (3)

表-2：「中國地方指導系統」

第一次	中國地方の全般的指導
第二次	中國地方の地勢指導
第三次	山陽地方の地域性深究指導 (一)
第四次	全 (二)
第五次	山陰地方の地域性深究指導
第六次	中國地方の地域的總括

指導」は、「中國地方指導系統」の第一次にあたる。図-8は、「中國地方の全般的指導」において、120頁に提示の図版である。この図版の下部に、指導案にあたる文章の提示がある。授業の流れを指導案の内容にしたがい、追ってみよう。該当頁は、120～121頁である。

まず、中国地方の描き方が導入である。発問は、「中國地方は近畿が蝶に似たやうに何かに譬へることは出来ぬか？」(p. 120)である。「龍の頭を相像せしめるやうだと幾分誇張し描き、口の所が何處に相當し、耳は何に當るかといふ風に水平肢節について讀圖せしめる。」(p. 120)と続く。

次いで、展開である。発問は、「中國地方はどちら

2) 「中國地方はどちらがよく進んでゐるか」の学習展開

「中國地方指導系統」は、全般的指導、地勢指導、地域性探究指導、地域的總括からなる。表-2に「中國地方指導系統」を示した。「中國地方の全般的

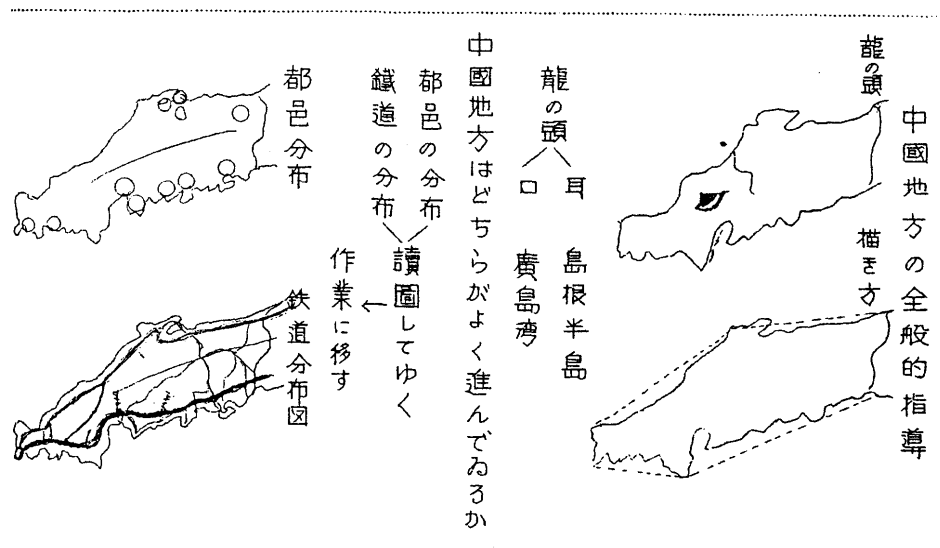


図-8：「中國地方の全般的指導」の図版

がよく進んでゐるか」(p. 120)である。この発問を考えるために、「次に白地圖に都邑分布圖・鐵道分布圖を作業せしめる。」(p. 120)にはいる。引用を続ける。「都邑分布圖には都邑の人口に應じ圓の大きさを加減して記入するやう注意し、各都市の人口を黒板に示して置けば児童は各自に作業することによって山陽地方は山陰に比して都邑の数も多く且つ大なるものが多いことに留意するであらう。鐵道分布圖は同じく白地圖に赤鉛筆にて鐵道線を記入せしめる。このとき何んなに短い支線をも漏らすことなく記入するやう注意を與へる。この作業により児童は鐵道發達狀態の兩者を自然に比較するのである。この鐵道分布圖に港の位置を記入して行くならば海上交通の狀態をも推量出来るであらう。」(p. 120)。さらに、「鐵道分布圖を示す時には、列車の回数・設備・速度による差異を示すことも忘れてはならない。」(p. 120)という注意がはいる。山陽と山陰との人口密度の比較に進む。

そして、「こゝまで學習が展開してくれば山陰・山陽の比較に於て山陽の方が余程進んでゐることは論を俟たぬところである。都邑が多く交通發達し人口の多い山陽の産業は如何であらうかの問ひに對し進んでゐるだらうとの豫想は着く。即ち日本海方面では農牧業が産業の主なものである。瀬戸内海方面では商工業が主な産業であるが農牧に於ても日本海方面よりも盛であることがよく理解出来るのである。」(p. 121)と整理する。

第1次の展開における「中國地方はどちらがよく進んでゐるか」の発問を、第四次の「山陽地方の交通と都邑」との関係でみておこう。図-9は、「山陽

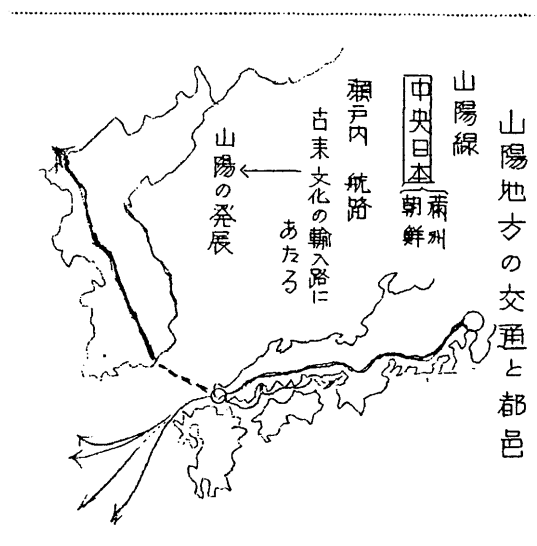


図-9：「山陽の交通と都邑」の図版

地方の交通と都邑」において、126頁に提示の図版の地図である。その図版に言及した指導案にあたる内容を引用する。「先づ中國概観の際に既に山陽と山陰の交通を比べるために鐵道分布圖を作業したが鐵道は山陽では如何なる發達振りを示したか復習。山陽は鐵道網が發達し山陽本線も山陰線に比べると余程設備も速度も優れてゐるのは何故であろうか考へしめる。考究の結果中央日本と滿州及朝鮮を結ぶ重要な役目を持つ線路たるを知らす。」(p. 126)。山陽本線の重要性を、中央日本と滿州及び朝鮮との関係で指摘する。

3. 「裏」と「表」との対比構造

かつて、「日本海方面」は、北前船が航行し、日本海沿岸の港湾都市は、繁栄をきわめていた。古厩忠夫(1997)は、「日本海交通の繁栄を端的に示すのが、江戸時代から明治初期にかけて北海道から大坂までを航行する北前船だった。幕末から明治にかけての時期には、「離れ島」の隠岐大山脇港にも毎年数十隻の北前船が風待ちに入港している。最大級のいわゆる「千石船」は一度に馬1000頭分以上の荷を運ぶ。物流のメインルートは陸ではなく海だった。北前船は天下の台所大坂と北海道・日本海沿岸各地とを結ぶ、当時の物流の幹線航路であった。」(p. 22)と述べる。

「中國地方の指導観」における「故に文化の進歩せる瀬戸内海方面を表とすれば日本海方面は文化の進歩の上からすれば裏に相當す。」の「文化」は、日本の近代化の文脈で捉えたものであった。かつての北前船の海上航路への延長で捉えられたものではなかった。

「裏」の表現に関して、古厩は、「……ここで注目したいのは「裏日本」の範囲である。東北は一つの地域として把握され、「裏日本」として区別されている。やはり、「裏日本」は、北陸、さらには、山陰なのである。」(p. 13)と言及する。「中國地方の指導観」における「故に文化の進歩せる瀬戸内海方面を表とすれば日本海方面は文化の進歩の上からすれば裏に相當す。」は、この「裏日本」に呼応する表現で

あった。

図-10は、古厩により引用されている「創業時代の鉄道路線図(1892年度末)」(p. 8)である。古厩は、この図に言及して、「見事なまでに太平洋岸にかたよっているのがあきらかであろう。太平洋岸は青森県から広島県(三原)まで縦貫し、北海道・九州につづいて四国にも鉄道が敷かれはじめているのに対し、日本海側は皆無。わずかに、太平洋岸への連絡線によって、敦賀が大阪と結ばれているにすぎない(同年4月1日、信越線が直江津まで延び、東京と結ばれた。)」(p. 9)と指摘する。そして、「鉄道は日本近代化の文字どおり機関車の役割を果たした社会資本の象徴であるが、日本海側はその建設政策の外にあったのである。」(p. 9)と結ぶ。

図-11は、「日清・日露戦後の鉄道路線概観(1906年3月末)」(p. 31)の図版である。古厩は、この図に言及して、「島根県の場合、明治20年代からの建設運動にもかかわらず、この時点でまだ鉄道がない三つの県の一つであった。山陰線が京都から同県の大社までやってきたのは大正元(1912)年、山陽線神戸-三原間の開通から20年後のことであった。山陰線が石見地方の浜田まで行くのはさらに10年おくれの大正10(1921)年、下関まで全線開通するのは昭和6(1931)年のことであった。機関車製造などの鉄道工場も、北海道手宮工場以外は大宮・新橋・神戸・小倉など太平洋ベルト地帯に設立された。」(p. 32)と述べる。

図-10：「創業時代の鉄道路線図(1892年度末)」(古厩, 1997, p. 8)

図-11：「日清・日露戦後の鉄道路線概観(1906年3月末)」(古厩, 1997, p. 31)

「中國地方の指導観」における「山陽の交通と都邑」での鉄道網への着目は、このような日本の近代化の文脈で捉えたものである。この着目は、同時に日本の近代化による空間的再編成に通底するものであった。交通基盤整備による空間的再編成を「裏」と「表」という記号に収束させ、地誌的記述の構造とした。戦後、国土空間編成における公共投資という装置が、さらに地域的格差を加速させた事態を捉えるとき、この地誌的記述の構造の重要性がみえてくる。つまり、「戦前」と「戦後」の連続性の問題³⁾としてである。

4. 地誌的記述の可能性

水岡不二雄(1999)は、「地理学⁴⁾は、かつて「地誌」という世界各地の場所的な多様性の記述を行っていた。中学や高校の「地理」の授業は、いまだ地誌中心的で、この古い地理学の伝統をいまだに引き継いでいることが多い。」(p. 160)と指摘する。そして、「このことから、「地理」という言葉をきいて地名や物産のあまり知的興味をそそらない羅列が心に思い浮かんでしまう人々は、「地理」から高校とともに卒業してしまう。」(p. 160)と続ける。このような「地名や物産のあまり知的興味をそそらない羅列」という表現は、これまでも繰り返し地誌を批判する常套句として使われてきた。

「地域的学習指導案」は、地誌的記述を基調とした探究的学習指導案である。本稿では、「地名や物産のあまり知的興味をそそらない羅列」を「羅列」としてではなく、時代の記憶として捉え直してみた。そのための作業として、「羅列」を構成する要素間の関係を抽出し、その構造を図式化してみた。この構造を読解するとき、鉄道網に象徴される交通基盤整備による空間的再編成の意味がみえてきた。

山根伸洋(1999)は、「19世紀における、欧米諸国が当事者として遂行してきた、世界大での交通基盤整備は、汽船海運網や電信網を世界規模において完成させており、そして19世紀の半ばには、その近代的交通網の末端に日本列島もまた係留されることになった。この世界規模における空間的再編成は、あらゆる地域を物理的にセンターとしての欧米諸国へ係留し、そして、地域間の諸関係を〈支配-被支配〉という文法によって構造化していくことに他ならなかった。」(p. 206)と指摘する。

地域間の諸関係の〈支配-被支配〉という文法は、国内においては、「裏」と「表」という記号に象徴される構造的な関係⁵⁾をもたらしした。山陽本線の重要性が、中央日本と満州及び朝鮮との関係で指摘された。このような地域間の関係性に、日本列島を一つ

の単位国家として、特に近代的交通網の結節として構築していった時代の潮流を見据えることができる。

本稿の考察は、「地域的学習指導案」における「中國地方の指導観」を分析するにとどまっている。地誌的記述をめぐる問題群を探る意味では、「地域的学習指導案」の詳細な検討が必要なことは、いうまでもない。「中國地方」だけではなく、「地域的学習指導案」の対象となっている他地域における地誌的記述の分析は、今後の課題である。いずれにせよ、この分析は、地誌的記述が、どのように日本の近代化と通底しているかの文脈に収束される。いいかえれば、地誌的記述に新たな可能性を引き出す試みとしての予察的な意味をもつ作業となる。

鉄道という装置は、距離感覚という新たな地理を生んだ。インターネットを中心にした情報革命は、どのような地理を生むのか。地誌的記述の新たな可能性を引き出すことは、情報革命の時代を見据えるためにも、重要な作業となり得るにちがいない。

付記

本稿の内容の一部は、第94回地理教育懇話会において発表しました。貴重なご意見をいただいた広島大学国際協力研究科教授の中山修一先生をはじめ、地理教育懇話会の諸氏に深く感謝いたします。

注

- 1) 「編輯者」は、「向井英三」(広島県三原女子師範学校附属小学校)、「発行所」は、「広島縣備南地學同好會」(広島県三原女子師範学校附属小学校)とある。「発行日」は、「昭和14年7月27日」である。「序」の部分に、「貧しい案ではあるがこの案の草稿に手をつけたのは七年も前のことであって、追ひ—訂正して現在に到ったものである。」(序 p. 1)との一文がある。
- 2) 「序」からの4頁分を含めると、255頁となる。
- 3) 「戦前」と「戦後」の連続性は、交通基盤整備による空間的再編成という文脈で捉えたとき、その様態がはっきりする。しかし、それだけではない。このテキストが構想され、編輯された1930年代後半は、国家介入の役割が、国土空間編成における公共投資という形で本格化していく時期だった。水内俊雄(1999)は、「……国家介入の強く出た1930年代前半は、国家介入の様態で言えば、公共土木事業の中央政府による直接施工や、補助金の定額化が本格的に普及し、救農土木事業、時局匡救事業などが国営で始められた時期にあたる。」(p. 176)と指摘する。さらに、「……現代日本において、土建国家論に結びつく地域開発にともなう公共事業の大きな政治的役割が強調される国家の介入の様態の原点が、この1930年代後半に見られることを指摘したい。」(p. 176)と述べる。
- 4) 水岡は、「地理学に批判の学としての可能性のあること」(p. 160)を引き出そうとする。

5) このような記号に象徴される構造的な関係が地域区分と結びつくとき、中山修一（1997）が指摘するような「……そこに一本の境界線で囲まれる地域は、それぞれの優劣差を表現し、……」（p. 2）などの危惧を孕むことになる。

文献

中山修一（1997）：『近・現代日本における地誌と地理教育の展開』。広島大学総合地誌研究資料センター，72 p.
古厩忠夫（1997）：『裏日本—近代日本を問いなおす—』。岩波新書，216 p.

水内俊雄（1999）：総力戦・計画化・国土空間の編成。『現代思想』変容する空間，vol. 27-13，青土社，pp. 174-195.

水岡不二雄（1999）：「連続性」と「分断」の相克と超克。『現代思想』変容する空間，vol. 27-13，青土社，pp. 160-173.

向井英三編（1939）：『備南地學』第四輯 日本地理指導案，広島県三原女子師範学校附属小学校，251 p.

山根伸洋（1999）：測量地図の集積と国家全域の捕捉。『現代思想』変容する空間，vol. 27-13，pp. 205-225.